

## 富士紀行（92） 厄災を焼き尽くせ！（吉田の火祭り） （H13/8/30 記）

学校の全天候型グラウンドは、学生や職員の体育訓練に大いに活用されている。その整備も学校長の指導もあって、逐次に進捗している。その中、朝（勿論課業開始前であるが、）普段は見かけない隊員10名余りが、法面の草取りをやっていた。聞けば12旅団の持続走訓練隊の諸官で、グラウンドを使わせて頂いているので、そのお礼を兼ねて草を取っているとのことであった。

また、偶々夕方のジョギングの最中に生徒隊が体育訓練をやっており、その訓練終了後5分という時間を限っての除草奉仕を行っていた。グラウンドは心身を鍛える道場であり、道場は聖なる地でなければならず、この為に使用者が自主的に整備することが必要だ。そのような意識が芽生えてきたのだろうか。

先日、機会を得て日本3奇祭の一つで、富士山の登山シーズンの終わりを告げる『吉田の火祭り』を見学した。大神輿と赤富士を模したおやまさんと称される神輿の御影が、午後5時を期して浅間神社から渡御が開始、夕闇せまる頃迎え提灯に守られ、子供神輿を従え、富士太々神楽の奉奏される「御旅所」に到着。小生等がお世話になった渡辺家の庭先が御旅所であり、神楽舞台である。

時を同じくして、元直径90cm、末直径30cm、高さ3mにも達する奇形と言うべき松明70本余（今回は75本）が立てられ、渡辺家の前の松明を第1番目として、この松明に富士吉田市長が点火、これを機に次々と全ての大松明に灯が点される。氏子各戸の前の井桁に組まれた松明にも灯が点され（嘗ては渡辺氏が、栄えある第一番目の松明に点火されたとのことだ。）、さながら市中が火の海と化す。誠に、奇祭と言うに相応しい様だ。金鳥居から本殿までの参道はまるで芋の子を洗うが如く、人々は、松明の火の粉を浴びて厄除けを願い、宝永の昔の噴火に想いを致して富士山の火の鎮まるを祈念する。穢れを清め一切の厄災を焼き払い、また、火を伏せると言う意味合いがあるのではなかろうか。屋台も2キロに渡る参道を狭しとひしめき合い、子供達がおねだりしている。今年の人出は報道によれば約20万人だという。



参道から一步入った家々では親族一同より集って庭先でバーベキューが点火前から始まっている。人波は、松明の燃え尽きるまで途切れることがなく、神楽舞いも引きつづき奉奏される。渡辺氏も神楽舞の後継者の育成が課題と話されていた。

尚、日本3奇祭とは、この「吉田の火祭り」と、静岡県島田市の「帯祭り」を列挙することには異論のないところだが、3つ目に、「諏訪大社の御柱（おんばしら）祭り」を採り上げ（百科事典）ているものと、愛知県国府宮の「はだか祭り」と挙げて（吉田火祭りのパンフ）あり、何れが確定されたものか不明。乞う御教示を。

例年だと8月26日は、富士総合火力演習の準備訓練があつて、祭を見学する機会は先ず無いと言わねばならない。今年は幸いなことに、26日は日曜日であつて、然も予行と予行の谷間であり、予行も順調であつた為、素晴らしい体験が出来た。

デジカメ初心者では火祭りの雰囲気を目く伝える写真を撮ることが出来なかった。